

新たな発見につながるか ★胡桃館遺跡合同調査始まる

建築遺材の年輪年代測定、墨書の有無など 市教委・奈良文化財研究所

胡桃館遺跡（北秋田市綴子）の調査が6月上旬、市教育委員会と、独立行政法人奈良文化財研究所（以下、奈文研）によって行われました。今年の調査は40年前の調査で出土した建築物の木材を、現代の最新科学を用いて、遺跡の謎の解明するものです。数年前に発掘当時には解読できなかった木簡（墨で文字が書かれた板）を奈文研が解読し、話題になったことから、今回の合同調査にも大きな期待が寄せられています。

■日本の「ボンベイ」？胡桃館遺跡

平安時代（今から千年前）の建築物がそのまま発掘されたことで話題になりました。

発見は昭和38年、現在の鷹巣中学校の野球場を整備していた時に、木柱を発見したことに始まります。さらに、当時の鷹巣農林高校の教師だった富樫泰時氏（元秋田県立博物館長）が配水路から建築物の一部が突き出していることを発見し、遺跡があることがわかったそうです。

発掘は昭和42年から3年間行われ、4棟の建物跡とその周りを囲む柵跡が発見されています。一説によると、これらの建物は西暦915年に十和田火山（現在の十和田湖）が噴火し、そのシラス洪水で埋まったといわれ、ヴェスヴィオ火山の大噴火で埋まったイタリヤのボンベイ遺跡に例えられることがあります。

■調査の内容

今年の調査は3つの方法で行われ

- ①木材の実測
建築物に使われている木材を一つずつ実測し、木材がどんな形をしているか、調べます。
この調査からは、千年前の人々がどのように杉を切り出し、運び、建物を建てたのか、明らかになるわけです。
- ②赤外線カメラによる墨書の有無
胡桃館遺跡では、これまでに3点の木簡がみつかっています。



文字が書かれた木簡

一つは、建築物の扉に書かれた、「お経をよんだ記録」。2点目は、「建」と書かれたもの、そして、3つ目は「米に関する帳簿」です。

特に3つめの木簡は、奈文研が解読したもので、「玉作」「伴」など、この地域に住んでいたと思われる人々の名前が書かれていたことで、全国ニュースにもなりました。

今回の調査では、300点以上もある木材すべてを赤外線カメラで調べると見えています。

③年輪年代測定

奈文研が行う最先端の研究分野に、年輪年代測定という分野があります。樹木の年輪の幅を一層ずつ正確に測ることで、木の切られた年代やその木が使われた時代を推測する手がかりが得られます。奈文研がこの研究方法を利用した法隆寺建築年代や、弥生時代の年代に関する成果は大変注目を集めました。

この年輪年代測定で胡桃館遺跡の建物に使われた木材を切り出した年が明らかになるでしょう。

■今後の調査について

奈良や京都の神社・仏閣を除いて、千年前の建築物が、そのまま残っている

る例はほとんどありません。まして、平安京（千年前の都）から遠く離れた、この土地に、校倉造（あぜくらづくり）という高度な技術で建物が造られたという記録は、歴史には残っていません。

市教委では、縄文時代後期（約4千年前）の伊勢堂岱遺跡をはじめとした地域の文化財の調査を行うことで、この地域の歴史を明らかにし、大切に保存し、後世に伝えたいと考えています。

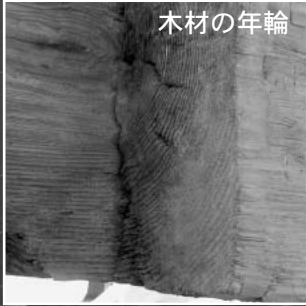
鷹巣中学校に隣接して設置されている胡桃館遺跡収蔵庫での調査は、今年の末まで継続して実施され、また、今後の調査結果を報告する予定です。今後とも胡桃館遺跡にご注目ください。

■お問い合わせ

北秋田市教育委員会生涯学習課
☎ 62・6618



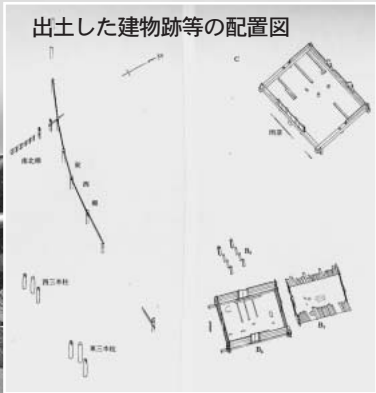
遺跡収蔵庫から屋外に出して行われた長さ約12mの建物基礎部分の計測調査。遺跡は、約1千年前の平安時代に埋没したといわれています。



木材の年輪



1千年前の加工跡が見られる木材の側面



出土した建物跡等の配置図



遺跡発掘当時（昭和42年頃）



赤外線カメラを用いて墨書を確認する研究員